

大西見山の収蔵に関わる交友関係について

下田 章平

はじめに

本稿は近代書画碑帖収蔵史研究の一環として検討するものである。この時期の収蔵史を体系的に理解するために、稿者は明治時代から現代までを暫定的に五期に区分した⁽¹⁾。本稿では、ボストン美術館の中国絵画コレクションや日本の関西を中心とする中国書画碑帖コレクションといった一大コレクションが形成され、中国書画碑帖収蔵史上の劃期をなす第二期（辛亥革命から第二次世界大戦終了時）において活動した大西見山（一八七〇—一九三〇）を取り上げる。

大西見山、名は行礼、字は和卿、号は見山、拜梅等多数に及ぶ⁽²⁾。香川県木田郡氷上村長楽寺の士族出身で、素封家の大西唯一、母トヨ（揚小三郎の叔母、一八五三—

一九一四）の長男として明治三年（一八七〇）九月一日に生まれた。明治二六年（一八九三）、明治法律学校（現在の明治大学）卒業後、郷里に戻り、高松百十四銀行（現在の百十四銀行）の取締役を務め、多額納税者として知られる。昭和五年（一九三〇）六月二十九日に没した。また、大西見山は漢詩人、蔵書家、書画碑帖の収蔵家としても著名である。その蔵書は昭和三六—三七年（一九六一—一九六二）に大谷大学図書館に購入されたが、書画碑帖に関しては、現在は子孫の所蔵に係るか、あるいは散佚の可能性もあろう。臨川李氏の四宝の一つである「啓法寺碑」（大西家所蔵）や「化度寺故僧邕禪師舍利塔銘」（いわゆる「化度寺碑」、大谷大学博物館所蔵）はいずれも重要文化財に指定されているように、日本でも有数の碑帖の収蔵家であり、さらには古銅印の収

蔵家としても知られている。

大西見山の書画碑帖の収蔵に関しては、すでに前稿において、大西見山コレクションの特徴やその収蔵事蹟の考察によって、明治末年から昭和初期にかけて日本へ流入した碑帖の流入過程について検討した^③。そして、大西見山コレクションが、主に羅振玉（一八六六—一九四〇）コレクション及び李宗瀚（一七七〇—一八三二）コレクションにより形成されたことを明らかにした。また、日本に碑帖がもたらされた契機は二度あり、明治末年から大正中葉までの羅振玉コレクションと、それ以後の李宗瀚、端方（一八六一—一九一一）コレクションによる流入であることが判明した。また、大西見山の交友関係については、田淵元博氏が香川県の漢詩人と知られる三野二山（一八八三—一九六六）^④、上掲前稿において、徳富蘇峰（一八六三—一九五七）、長尾雨山（一八六四—一九四二）との交友関係について言及するだけであり、これまであまり検討されてこなかった。

そこで、本稿では、博文堂関係資料によって大西見山をとりまく書画碑帖の売買及び鑑定をめぐる交友関係について明らかにすることを目的としたい。このことにより、単に大西見山の書画碑帖収蔵ネットワークが明らか

になるだけでなく、近代書画碑帖収蔵史の第二期における書画碑帖の日本への複層的な流入経路を明らかにすることができよう。

ここで、上掲前稿をもとに、博文堂関係資料の概略について記しておきたい。博文堂は原田大観（二代目庄左衛門、一八五五—一九三八）が原田家の家督と庄左衛門の名跡を継承した書肆、出版社であり、明治四〇年代（一九〇七—一九一二）には美術書の出版や、書画碑帖を扱う美術商として活動を開始した。また、例えば、原田大観の二男の油谷達（一八八六—一九六九）が代表であった時代を「油谷博文堂」と称するように短期間で屋号を変更しており、単に博文堂という場合は、「油谷博文堂」等の総称として用いることにしたい。また、博文堂関連資料は、従来一具のものとして保管され、少なくとも戦後になってから、二男の油谷達、三男の原田耕三（一八八九—一九七八）、五男の原田悟朗（一八九三—一九八〇）の三兄弟で分割された。そして、油谷家所蔵資料はすでに流出し、現在は個人蔵となっている。原田耕三家所蔵資料も大部分がすでに散佚しているが、ご遺族のもとにごく僅かに確認できるものがある。原田悟朗家所蔵資料は行田市郷土博物館に寄贈され、行田市

郷土博物館編『行田市郷土博物館収蔵資料目録 原田庄左衛門家資料目録』（同館、二〇二一）として整理されている。このほかに、関連資料として、徳富蘇峰記念館（神奈川県中郡二宮町）所蔵の徳富蘇峰（一八六三—一九五七）宛大西見山書簡が存在する。なお、本稿で取り扱う書簡に関しては、行論の都合上、整理番号を附す。油谷家旧蔵資料（現個人蔵）には「WEI-001」から「WEI-018」までの整理番号が所蔵者によって附されており、これを使用する（枝番については、稿者が私に附す）。原田悟朗家旧蔵資料（行田市郷土博物館）は、上掲『行田市郷土博物館収蔵資料目録 原田庄左衛門家資料目録』に基づく。また、漢字の表記は引用文献も含めて通行字体、人名は通称を用い、地名は当時のままとし、「」には割注、「」には稿者が補足した語句を記し、「」は改行を示すことにしたい。

一 書画碑帖の売買をめぐる交友関係

前稿では博文堂を介して羅振玉や李宗瀚コレクションを入手した^⑤ことについて見てきたが、ここでは、博文堂以外の大西見山の書画碑帖売買に関する交友関係につい

て検討しておこう。

（1）文求堂（寸紅堂）

文求堂は文久元年（一八六一）に京都で開業し、明治三四年（一九〇一）に東京本郷へ移転した中国書専門店である。実弟の田中常太郎（一八八五—一九三九）は明治四二年（一九〇九）、京都に寸紅堂を開業し、明治末年には書画碑帖を扱うようになった^⑥。また、寸紅堂は明治末年には博文堂が活動する広島県東部にまで販路を広げて競合し、しかも、博文堂と同じく初期羅振玉書画碑帖コレクションを取り扱っていた。

明治四五年（一九一二）二月七日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-001-5）に、

初六〔二月六日〕貴東拝見仕候陳者先般御／依頼仕候堂号之義色々御厚配之為め羅〔振玉〕藤〔内藤湖南〕両先／生に於て早速御撰／定被下候由御報被下／難有奉深謝候／帖祖之二字ハ如何／ニも妙と奉存候間何／卒羅〔振玉〕先生の御揮／毫御願ひ被下度頼／み上候字体ハ篆隸／何れニても宜敷候得共先年介文求堂篆／書御依頼致し居候間可相成ハ隸書なれハ一入難在仕合ニ御坐候

とあるように、大西見山は博文堂を介し、羅振玉に対して、隸書で堂号「帖祖齋」の揮毫依頼を行っている。一方、本書簡には「先年介文求堂篆／書御依頼致し居候」とあるように、羅振玉が京都に避居してまもない明治四四年（一九一〇）には、すでに文求堂を介して羅振玉に篆書作品の依頼を行っていたことが判明している。このことは、博文堂よりも先に、文求堂が京都避居後の羅振玉に接近していたことを示すものといえる。

また、明治四五年（一九一〇）三月二三日油谷博文堂宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-003-1）には、

……○文／求堂も頻りに書画を見せ候得共何分代価の高きに閉口致し候

と見え、明治四五年（一九一〇）四月一七日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-003-3）には、

……過日文求〔堂〕代人として／寸紅堂突然羅〔振玉〕／氏御藏書画卷／軸数種相携へ／来訪又昨日古瓦磚及六朝仏象〔像〕目錄送致夫々／一見藏棄の富／ニ驚き入り候……既ニ文求／等も手を入れ居候／事故充分御含み置被下度候

とあるように、明治四五年（一九一〇）三月には、文求堂が大西見山のもとに書画を持ち込み、同年四月には、

文求堂の代理として寸紅堂が大西見山のもとに羅振玉コレクションを持ち込み、また、古瓦磚と六朝仏像の目錄二種も送付してきたという。寸紅堂は、大西見山のもとに立ち寄る直前に、広島県の収蔵家、久野錦浦（二八七五―一九一八）のもとへも羅振玉コレクションなどを持ち込んでおり、この頃より、文求堂の関西における書画碑帖販売の強化の一端を担っていたことがわかる。

しかし、明治四五年（一九一〇）四月二三日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-003-4）には、

……文求〔堂〕ハ過日来目錄「古銅／器／古瓦博〔磚〕／六朝仏」送致尽一／見仕候御収蔵之／富ニ驚き入り候／若し御割愛相／希ひ候物御坐候ても／従来宋拓古印／等ニ付格別御／尽力被下候事故／貴下〔油谷達〕の御周旋／相希度積り故／文求〔堂〕へハ目錄相返／し何物も注文不／致候間御安神〔心〕／可被下候尤も文求〔堂〕／分ハ同人所持の王／漁洋〔士禎〕詩幅買受け候〔是ハ羅〔振玉〕先生の御鑒／定を経候由故〔羅振玉〕先／生の御題跋出来候上にて／引取り候約束ニ候〕

と記されるように、大西見山は、羅振玉の古印、宋拓コ

レクシオンを博文堂に周旋してもらった恩義によって、文求堂の目録は返却して何も買わず、博文堂の周旋を願っていた旨を伝えている。これ以後、確かに大西見山の博文堂宛書簡には文求堂（寸紅堂）の名が見えない。

ただし、大西見山は例外的に、文求堂が周旋した書画碑帖を少なくとも二件購入している。本書簡に見る「王漁洋詩幅」と、「翁方綱校勘淳化閣帖」である。

「王漁洋詩幅」は、清初の詩人、王士禎（一六三四—一七一）の詩幅であり、明治四五年（一九一二）四月に購入され、大正二年（一九一三）には博文堂関連の展覧会（委細不詳）に出品されている⁽⁸⁾。

「翁方綱校勘淳化閣帖」は、『王覃谿校勘秘本淳化閣帖』（法書会出版部、一九一五）として刊行された、翁方綱（一七三三—一八一八）の校勘が見られる「淳化閣帖」肅府本のことを指す。ちなみに、肅府本とは、天啓元年（一六二一）に完成した「淳化閣帖」の翻刻本のことである。

明治四五年（一九一二）三月五日油谷博文堂宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-002-3）に、

……文求〔堂〕の淳化帖ハ申遣し候得共未／「一三枚目」た見せ不申候多分〔中村〕不折画伯あたりの

／手に落ち候事と想像し居候

とあるように、明治四五年（一九一二）三月頃には文求堂が中国から将来したものと推察される。そして、明治四五年（一九一二）三月二三日油谷博文堂宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-003-1）に、

……文求〔堂〕将来の淳化ハ大抵帖祖齋の／物二相成候見込みニ候

とあるように、同月には大西見山が入手している。しかし、同年七月九日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-006-1）に、

……尚々所蔵の翁〔方綱〕氏／旧蔵肅府〔本淳化〕閣帖／其後澄清堂及宋／拓淳化〔閣〕帖と充分／対校仕候処既ニ右／二帖を蔵する以上／ハ強て必要も無之候／間都合ニて沽却／致し度候間若し貴／地ニ望の人も御坐候得／ハ何卒御周旋相／希度候代価ハ／千三百以上五百以下ニ御坐候

と記されるように、この頃には大西見山「澄清堂帖」と「宋拓淳化閣帖」を入手していたために、明拓の「翁方綱校勘淳化閣帖」を、恐らくは文求堂からの買値に近い、一三〇〇円から一五〇〇円の間で売却するよう、博文堂に依頼している。しかし、その後も売却は不調に終

わり、大正一三年（一九二四）一二月の段階でも大西見山の手許にあったようである。⁹⁾

（2） 泉水信太郎

明治四五年（一九一二）三月六日油谷博文堂宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-002-3）に、

……過日東京泉水信太郎方漢史晨前後／碑送り来り候肅肅不減本にて一寸妙と存／し候得共同し事なれハ他日羅〔振玉〕先生御藏／の分御譲与相希度存し其儘返送／致し申候

とある。泉水信太郎は千葉県出身、明治三二年（一八九九）に東京外国語学校（現在の東京外国語大学）の清語学科を卒業した人物である。¹⁰⁾『書苑』二巻八号（一九一三）の「蘭亭脩禊記念会記事」（二一六頁）に「協賛会員」（二頁）として名が見え、「歙県蘭亭墨帖」（四頁）を出品している。よって、泉水信太郎は、中国通であり、また書画にも関心のあった人物と見なすことができる。ただし、現段階で骨董商としての活動は確認できないため、個人輸入の形で大西見山のもとに「史晨碑」（二六九）の碑陽、碑陰の揃った一具の拓本（「前後／碑」）を送付したのであろう。

「肅肅不減本」の「肅肅」とは、「史晨碑」（碑陽）第四行二二、二三字を指し、「肅」第四行二三字は道光初年以後に欠損が見られるという。よって、「肅肅不減本」とはそれ以前の拓本を指すのであろう。¹¹⁾

（3） 山中商会

山中商会は、山中定次郎（一八六六—一九三六）が日本及び欧米に展開した骨董商であり、明治四五年（一九一二）三月頃に高価な書画類を除く恭親王コレクションを一括して購入したことで、世界的な名声を博した。¹²⁾

明治四五年（一九一二）五月一八日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-005-1）に、

……尚々近來山中〔商会〕方頻ニ入／札目錄送り来り候得共／先般來御蔭ニて羅〔振玉〕／先生名品拝見致し候為／め宛力も京美人を見て而／後田婦ニ対する如く頓と／氣か移り不申候好笑

とあるように、山中商会も出入りしていたと見られるが、大西見山にとっては、羅振玉コレクションのほうが優品であると思なしていたようである。ちなみに、山中商会が販売した中国文物には書画碑帖も含まれていたと

見られ、例えば、明治四五年（一九一二）七月二二日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-015-1）に、

……節庵〔溥光〕禪師卷／両〔羅振玉、内藤湖南〕先生御鑒定にて真／迹と相定まり大／慶不過之候実ハ／先〔達〕手山中〔商会〕方手ニ入れ候／品にて餘り廉価故／少々不思議ニ存し／居候得共今回御跋／文御認め被下候得ハ／大ニ安神〔心〕仕候

とあるように、元僧の「溥光禪師卷」を廉価で入手している。なお、本書簡に見える「御跋／文」とは羅振玉によるものである。⁽¹³⁾このように、明治四五年（一九一二）頃、山中商会は頻繁に入札目録を作成し、中国の文物を日本の収蔵家に販売しようとしていた実態が判明した。

（４）東京二酉堂

東京二酉堂は、『郵便振替貯金加入者氏名及番号』（郵便貯金局、一九〇九、四四頁）に、

東京 貳九番 石倉千次 二酉堂 東京市神田区松永町二十九番地 図書出版業

とある「二酉堂」と推定される。「二酉堂」は琉璃廠でも著名な書肆であり、屋号はそれに基づく可能性が高い。那波利貞『燕呉載筆』（同文館、一九二五、一四二頁）

には、「……二酉堂に至りては明代以来の老書肆と謂はれ、北京の書肆の耆宿として老二酉の名さへ称せらるる所、……」と記されている。大正二年（一九一三）二月二六日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-008-2）に、
○乍序申進候過日／東京二酉堂将来／の宋拓麓山寺碑〔呉平斎〔雲〕潘祖蔭／旧蔵品〕／一帖送来候間例の／分と比較仕候処過／眼にてハ在伯仲の間／物の様見受け候併／し重複致し候間今／夕ハ一先返送致し候

とあるように、東京二酉堂から、清の呉雲（一八一―一八八三）、潘祖蔭（一八三〇―一八九〇）旧蔵の「宋拓麓山寺碑」が送付されたが、例の（羅振玉所蔵本を指すと見られる）「宋拓麓山寺碑」と大差がないことから返却したという。⁽¹⁴⁾

（５）長崎池庄

河瀬秀治^{ひではる}（一八四〇―一九二八）「○上海居留日本商人の景況」（『商務局雜報』第二七号、大蔵省商務局、一八七九、八三頁）に、

……上海居留ノ日本人ヲ通計スレハ其数百七十余人ノ多キニ及フト雖モ商業ニ従事スル者甚タ僅々ナリ

……永昌号「長崎池庄出店／陶器漆器等」

と記載されるように、長崎池庄は少なくとも明治一二年（一八七九）には上海に出店し、陶器や漆器を販売していたことがわかる。上掲大正二年（一九一三）二月二六日油谷達宛大西行礼書簡（WEI-008-2）に、

……又数／日前長崎池庄と／申候道具屋程松／円〔嘉燧〕山水画冊将来／当地道具屋大／讃ニて持参一見仕／候処一昨年拝見／の羅〔振玉〕氏之分ニ比すれ／ハ全く似非物ニ相／違なく不覚失咲〔笑〕／仕候とあるように、大西見山は羅振玉所蔵品を基準作品として鑑定を行っていたことがわかる。¹⁵また、長崎池庄は香川県 の 骨董屋の大讃を通じて大西見山と接点を見出したことも特筆される。

（6）廉泉

廉泉（一八六八―一九三二）は、江蘇省無錫の人。字は恵卿（恵清）、号は小万柳堂、詩人、書画碑帖の收藏家として活動し、文明書局の経営にも参画した。¹⁶宮本昂、宮玉甫兄弟旧蔵の明清書画名家約八〇〇名による扇面一〇五三枚のコレクションは著名である。大正三年（一九一四）一二月には、神戸に南湖扇面美術館を開館

した。計六度も来日して日本人士と交流し、時にはコレクションの売却を図っている。

大正四年（一九一五）一〇月一二日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-013-4）に、

……扱て先日 の 鄧完／白〔石如〕双聯ハ至極／妙品ニて今以て／未鍊〔練〕相残り申居候／処先日廉〔泉〕氏々／山石写真送り／呉れ候様通知／御坐候間右写真／一見の上の都合ニて／御面談致し度事／出来候哉も知れず／候間其御含ミ相／希候

とあり、また、大正五年（一九一六）三月一二日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-014-2）に、

……昨日廉〔泉〕氏々書／帖及完白〔鄧石如〕銘詞景／本御送り被下候其れニ／依れハ石ハ横四尺／高一尺と申事ニ御／坐候左すれハ餘程之大石ニて日本流の／坐敷特ニ拙宅等／ニてハ到底陳列／之場所無之且又／平生持扱ニも困／難可致と存候間／石ハ如何ニも結構／なる物と想やられ／候得共何分右／之次第ニて不得／已断念仕候何／卒此義御先／方へ御話之上宜敷／御断奉願候因／て完白〔鄧石如〕楹聯一副、及廉〔泉〕呉〔芝瑛〕両家尺牘、／楹聯目錄、

等一／併返上仕候間御／查收奉希候

とある。この二書簡を見ると、原田大観によって廉泉コレクションが大西見山に仲介されたが、結局のところ、購入はせずに返却されていることがわかる。

「鄧完／白〔石如〕双聯」と「完白〔鄧石如〕楹聯一副」とは同一のものと見られ、南湖扇面美術館に展示されていた「滄海日對聯」（嘉慶九年〔一八〇四〕、隸書）を指すものと見られる。⁽¹⁷⁾ また、「完白〔鄧石如〕銘詞」（委細不明）の刻された石板自体も購入しようとしていたようであり、大西見山は鄧石如（一七四三—一八〇五）の書にも関心が高かったことがわかる。

（7）彙文堂

野田宇太郎によると、彙文堂は漢籍、中国書専門の書肆であり、少年の頃から文求堂で奉公した大島友直（？—一九二二）が、明治四〇年（一九〇七）に独立し、河原町荒神口下ル東側に河井荃廬（一八七一—一九四五）の命名で開業したという。明治三九年（一九〇六）、京都帝国大学文科大学が開設されるに伴い、明治四五年（一九一二）に寺町通丸太町南入に移転したという。大正五年（一九一六）年一〇月には『冊府』という目録兼

論考掲載の小冊子を刊行している⁽¹⁸⁾。店の看板「彙文堂書莊」は内藤湖南（一八六六—一九三四）の手によるものであり、現在も営業している。大正五年（一九一六）一〇月二二日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-016-1）に、

……先刻彙文堂方支那／書画目録参り一見仕候処大分／名人の名前御坐候御一覽被成候哉如何

と見えるように、京都の書肆、彙文堂においても、文求堂の書画碑帖の売買に倣い、取り扱うようになったと考えられる。

（8）大谷瑩誠

大谷瑩誠（一八七八—一九四八）は、真宗大谷派の僧で、第一三代大谷大学学長である。院号は能淨院、別号は禿庵。漢籍、敦煌文献、古印、硯などの中国文物を中心としたコレクションを形成し、その多くは大谷大学に寄贈され（禿庵文庫）、平成一五年（二〇〇三）に設立された大谷大学博物館で展示されている。

大正一三年（一九二四）一月二六日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-017-3）に、

……陳者只今電話にて御談／致候得共尚重ねて申上

候／能淨院大谷師〔瑩誠〕御来駕の義拝／承致候御
同好の事故何尔〔に〕ても／御覧ニ入れ申候……尚
日取御確定被来／候得ハ御一報可被下度候／法帖全
部及銅印ハ必ず取／寄せ申置候

と記されているように、上掲「化度寺故僧邕禪師舍利塔銘」を含めた大西見山コレクションの売却を、原田大観を介して大谷瑩誠に打診している。同年一二月になっても交渉は不調のままであったが、その後再交渉が行われて大谷瑩誠に売却されている。⁽¹⁹⁾ ちなみに、この大西見山と大谷瑩誠との交友関係により、昭和三六―三七年（一九六一―一九六二）には、大西見山の漢籍が大谷大學に購入されている。⁽²⁰⁾

（9） 江藤濤雄

江藤濤雄（一八八〇―？）は、中国文物を取り扱った東京の骨董商であり、下谷区上野花園町四に店舗があったという。屋号の長安莊は、義和団事件（一九〇〇）当時、西安に滞在していたことによる。⁽²¹⁾

大正一四年（一九二五）四月一六日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-018-5）に、

……先日東／京江藤〔濤雄〕を金沢文庫／本古写文

選一卷写真送／〔七枚目〕来候（内藤）湖南先生
ハ既ニ御覧被成／候由ニ御坐候）品物ハ氣ニ入候／
得共代価の昂きニ驚入申候

とある。「金沢文庫古写文選一卷」は「金沢文庫本古写文選」（国宝、東洋文庫所蔵）を指すと見られ、江藤濤雄は大西見山に斡旋していたことが窺われる。また、昭和四年（一九二九）三月二二日原田悟朗宛大西行礼〔見山〕書簡（C-11-2）に、

……然ハ羅原覚氏／御来訪之義御紹介相成候処実ハ
／先日江藤〔濤雄〕を同様の義照会御／坐候得共
……羅〔原覚〕氏とは是非迎謁拙藏の物乞／清鑒併
へ御将来の〔集字〕聖教序善／本も拝見仕度候得共
生憎前述の／仕合折角遠客を迎へ席／上突然発作
致し候てハ甚失礼／仕候間乍遺憾此度ハ御断り申上
／け他日御航之時を期し度候

と見えるように、江藤濤雄は、広東の書画碑帖の收藏家である羅原覚（一八九一―一九六五）の歓迎会に大西見山を誘っている。また、この歓迎会は原田悟朗からも誘っているように、長安莊と博文堂は書画碑帖の販売において協力関係にあった可能性があるろう。

(10) 林朗庵

林朗庵（一八九七—一九七一）、名は熊光、実業家、書画碑帖の収蔵家として名高い⁽²²⁾。林朗庵は関東大震災（一九二三）で罹災したために、この時期に自身のコレクションを売却したものと考えられ、その一部は大西見山が引き受けていた可能性が高い。

大正一三年（一九二四）四月三〇日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-017-6）に、

……例之林／熊光〔林朗庵〕帖代金決済／未了にて誠二心苦敷／存候間一先返上致／置度明日幸便有／之托之返上致させ候／間御照収可被下候

とあるように、大正一三年（一九二三）四月には、林朗庵から何かしらの碑帖を購入している。また、同年五月二一日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-017-7）に、

……林〔朗庵〕氏藏品之内左記／三点一応拝見致し度候間御差支へ無／之候得ハ御発送／希上候尤京都の例の人〔寸紅堂の田中常太郎〕へハ極内にて／一張船山〔問陶〕書画帖／一紙蒼水〔煌言〕行書幅／一龔鼎孳行書幅／計三点

と見えるように、断続的に林朗庵コレクションを原田大

観を介して購入していたことが判明する。林朗庵は文求堂（寸紅堂）とも関わりが深かったため、博文堂と競合する恐れがあった。そのため、大西見山は「京都の例の人へが極内にて」と記したのであろう。

(11) 親族

大西見山の親族で、収蔵に関わった人物には橋本吉兵衛（一八六二—一九二四）と伊藤長次郎（五代目、一八七三—一九五九）がいる⁽²³⁾。橋本吉兵衛は、広島県平民で多額納税者、第六十六銀行の頭取などを務めた人物であり、大西見山の妻タツの兄であった。また、大西見山の三女節（一九〇三—？）は橋本吉兵衛の長男、橋本龍一（一八九三—一九六八）に嫁しており、橋本吉兵衛とは昵懇の仲であった。また、伊藤長次郎は兵庫県平民で多額納税者で実業家、貴族院議員を務めた人物であり、大西見山の妹エイ（一八七五—？）が嫁いでいる。

大正二年（一九一三）二月一九日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-008-3）に、

……過日来播〔磨〕備〔前〕地／方へ参り居り橋本〔吉兵衛宅〕／にて例の鄒一桂／百花百詩巻及／ひ朱竹垞〔彝尊〕詩冊並／二張船山〔問陶〕墨梅／小

卷一見仕候百／花百詩ハ実ニ想／像以上の見事／なる物ニて驚歎／の外無之候又竹／垞〔朱彝尊〕詩冊ハ特ニ不／堪垂涎候……次ニ羅〔振玉〕氏御所／蔵の古錢五百／枚始終念頭ニ／懸り居候得共其儘／ニ辛防〔抱〕致居り過／日義弟伊藤／長次郎へ相話し／申候処如何ニも珍〔珍〕／ら敷物故ほしき／物と申居候処本日／別番の通り申来り候間御都／合ニて一応同人へ／拝見方御斗ひ被／下度成否ハ難／予測候得共多／分頂戴致候事と／存候間可成ハ現／品の一部分なり在／見本として神戸三／宮穴門上伊藤／地、処差配、迄／乍御苦勞御携／帶御出張被下候得ハ／好都合ニ御坐候／同人ハ斯道ニハ至／極嗜好なき者／故古錢の可貴事／及羅〔振玉〕藤〔内藤湖南〕両先生／御意見充分／御話し被下度同人／ニ於て収蔵致し候／得ハ小生〔大西見山〕所蔵と同／様ニて当人〔伊藤長次郎〕々小生〔大西見山〕之／方大満足ニ御坐候／若し御出張之節／ハ前以て御照会／被下候得ハ同人〔伊藤長次郎〕神／戸へ出後迎接／致し候筈ニ御坐候

とあり、大正二年（一九一三）二月に大西見山が橋本吉兵衛宅と伊藤長次郎宅に訪問したことが記されている。

る。橋本長次郎宅で過眼した「例の鄒一桂／百花百詩卷及／ひ朱竹垞〔彝尊〕詩冊並／ニ張船山〔問陶〕墨梅／小卷」は、「例の」とあるように、初期羅振玉書画碑帖コレクションを指すと見られ、博文堂を介して購入されたものと推定される²⁴。そのように言えるのは、明治四五年（一九一二）二月六日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-001-4）に、

……尚々宋拓の事過日／早速橋本〔吉兵衛〕へ通知
／仕候処澄清堂帖／と漢印とにハ一驚／致候様子ニ
御坐候

とあるように、橋本吉兵衛にはそもそも骨董趣味があり、明治四五年（一九一二）頃には、少なくとも大西見山を介して博文堂と面識を得て、その後博文堂から購入した可能性が高いからである。

また、伊藤長次郎に関しては、大西見山を介して博文堂と面識を得たことがわかる。本書簡には、大西見山が購入を見送った羅振玉所蔵の古錢五〇〇枚に関して、義弟の伊藤長次郎に勧め、油谷達にその一部分を伊藤長次郎方に送付し、骨董趣味のない伊藤長次郎に対して、古錢の価値について羅振玉、内藤湖南の意見を添えて説明するように指示しているからである。

博文堂はその後、神戸の伊藤長次郎のもとを訪れたようであり、大正二年（一九一三）三月五日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-009-1）に、

拜啓陳者過日ハ／神戸御出張被下／尚又御入洛日ニ御／周旋被下御蔭を／以て妙品沢山手ニ／入り大満足之旨昨／日伊藤〔長次郎〕方申来り候／此段小生〔大西見山〕方也大ニ／御礼申上候目錄一／覽仕候処錢舜／挙〔選〕／以下何れも名品ニ／て小生〔大西見山〕も大慶此事／ニ候宋刻絲画幅／ハ伊藤〔長次郎〕も大喜と拝見／候……尚々過日伊藤〔長次郎〕拜／見仕候非売品の／銅器二種ハ如何／なる物ニ候哉御序／之節品名御一／報奉希候

と記されている。博文堂は古銭だけでなく、「御入洛日」以下に見えるように、神戸出張前に京都の羅振玉のもとから書画及び古銅器のコレクションを持ち出して、伊藤長次郎に紹介したようであり、伊藤長次郎は少なくとも「宋刻絲画幅」をこの時に購入している。また、大正三年（一九一四）三月一四日油谷達宛大西行礼〔研山〕書簡（WEI-012-1）に、

……伊藤〔長次郎〕方今以て手帑参／り不申候……手帑之有無／ニ拘はらずか、ル天下之妙／品ハ此機

会を以て是／非同家の所蔵と帰し／候様乍蔭祈申居候

とあるように、大西見山は強く古銭に関して伊藤長次郎に斡旋するように伝えているが、交渉は不調に終わったようである。⁽²⁵⁾このように、伊藤長次郎も大西見山の斡旋により博文堂より文物を購入したことが判明している。

以上の検討結果に基づいて、近代書画碑帖収蔵史の第二期における書画碑帖の日本への複層的な流入経路について確認しておきたい。まず、明治末年から大正初めにかけては、大西見山のもとへ、個人での売り込み（泉水信太郎）や、他業種（文求堂〔寸紅堂〕、東京二酉堂、長崎池庄、彙文堂）からの参入が確認されるように、中国の書画碑帖の市場は、これからの拡大が見込まれる新規開拓分野と見なされていたことが判明する。そして、本格的な市場形成のきっかけを作ったのは、京都避居に伴い、日本に大量の文物を持ち込んだ羅振玉であったといえる。そして、山中商会、東京二酉堂、長崎池庄の例に見るように、収蔵家の大西見山は、このような持ち込まれた書画碑帖に対して、初期羅振玉コレクションによって鑑識眼を養い、それらを基準作品として購入の検討を行っていたことが判明した。

また、大正中葉を過ぎると、書画碑帖の優品を扱う業者は、少数の業者によって寡占されていく状況が明らかとなった。その代表的な業者として文求堂（寸紅堂）と博文堂が挙げられ、両者は競合関係にあったことで知られる。特に、初期羅振玉コレクションをめぐっては、久野錦浦や大西見山の事例にも明らかのように、両者がともに交友関係にあった羅振玉のコレクションをめぐって熾烈な販売合戦が繰り広げられている。

このような中で、大西見山は羅振玉の古印、宋拓コレクションを博文堂に周旋してもらった恩義によって、明治四五年（一九一二）以後は博文堂を出入り業者として優遇したようである。このことについては、廉泉、大谷瑩誠、林朗庵の事例に見られるように、コレクションの売買に関しては博文堂を介して行っていたことから明らかである。

このほかに、江藤濤雄の長安荘は羅原覚の歓迎会の事例に見られるように、博文堂と協力関係にあり、彙文堂は文求堂の影響下で書画碑帖を販売するようになり、詳細は不明であるが、骨董商の山中商会も書画碑帖の販売を行っていたことが判明した。また、大西見山は橋本吉兵衛や伊藤長次郎といった親族へも博文堂を紹介し、伊

藤長次郎に、博文堂の文物斡旋を代行するような事例も見受けられた。この状況は同じく初期羅振玉書画碑帖コレクションを収蔵した久野錦浦の事例とも共通する⁽²⁶⁾ように、初期の博文堂の活動は地方の有力な収蔵家に書画碑帖の斡旋を委任していたからである。

ところで、大西見山が書画碑帖の収蔵に明け暮れていた頃、香川県下における収蔵家の書画碑帖の収蔵対象はどのようなものであったのだろうか。大正二年（一九一三）一月一四日油谷達宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-007-5）に、

……〔九枚目〕現に昨春漢印宋帖を収め／候て以后
城中骨董家輩／〔田能村〕竹田〔頼〕山陽乃至藍田
叔〔瑛〕沈南蘋〔銓〕等／の尋常書画携へ来候得
共殆んと／不興一顧大々の気焰を吐き居候次第／
〔二〇枚目〕二御坐候

とあるように、城中（ここでは高松を指す）における書画骨董家の集まりでは、地元の収蔵家が田能村竹田（二七七七―一八三五）、頼山陽（二七八一―一八三二）、藍瑛（一五八五―？）、沈銓（一六八二―？）らの作品を持ち寄っているが、これらはいずれも前代の江戸時代から人気を博したものであり、書画碑帖の収蔵対象が旧

態依然であったことを物語っている。このような状況に
対して、中国の書画碑帖にいち早く関心を抱いた大西見
山は、「殆んど／不興一顧」と述べている。また、大正
一三年（一九二四）一月二十五日原田庄左衛門〔大観〕
宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-018-4）にも、

……当処骨董家連時々参り／〔六枚目〕候得共流行
物のみにて頓と／足観物無之

と記されるように、大正末になっても、先述の日本書画
を指すと見られる「流行物」が依然として収蔵対象で
あった。この香川県下の状況は日本全体でも同様であっ
た。²⁷

すなわち、久世夏奈子氏によると、昭和五年（一九三〇）
前後に、主に辛亥革命以後に日本に将来された新来の中
国絵画の評価が確立したということからも明らかかなよ
うに、²⁸中国の書画碑帖の市場は、これからの拡大が見込
まれる新規開拓分野であったものの、日本の多くの収蔵
家は日本書画を収蔵対象としており、中国の書画碑帖に
はあまり関心がなく、これらを収蔵対象としたのは、漢
籍に素養があり、中国文化に造詣の深かった大西見山の
ような人物に限定されていたと見ることができる。

二 書画碑帖の鑑定をめぐる交友関係

すでに前稿において、徳富蘇峰と長尾雨山との交友
関係について検討した。前者については、大正二年
（一九一三）七月に、徳富蘇峰が大西見山邸を訪問して
『国民新聞』誌上で取り上げ、大西見山の収蔵家として
の名声を高めている。また、後者に関しては、大正三年
（一九一四）一月、長尾雨山が中国から帰国し、大正
四年（一九一五）六月には大西見山邸に逗留し、大西見
山コレクションの鑑定にあたっている。それ以後も、長
尾雨山は寿蘇会、赤壁会を開催したことで、大西見山に
北宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一）にまつわるコレク
ション収集の契機をもたらし、さらに、長尾雨山所蔵文
物の売却交渉も行っている。このように、大西見山は長
尾雨山との交流によって文物の知識を広め、一方の長尾
雨山は文物の売却や鑑定によって自身の活動資金を得て
いたと判断される。

この検討結果を踏まえた上で、ここでは黒木欽堂と博
文堂をめぐる鑑定家（羅振玉、内藤湖南、長尾雨山）と
の交友関係について分析したい。

表1 『書苑』に提供された大西見山コレクションについて

作品名	初掲載年月	掲載号他
明人沈嘉則 〔明臣〕草 書詩卷	1912.9.5	2-1。黒木欽堂の解説。後藤漆谷（1749-1831）旧蔵。菅茶山（1748-1827）、頼山陽（1781-1832）等の題跋あり。
翁方綱校勘 淳化閣帖	1913.1.5	2-5、2-6、2-9。黒木欽堂の解説。翁方綱（1733-1818）、淮陰鮑氏旧蔵。明治45年（1912）3月頃、文求堂を介して購入。
旧拓宝晋齋 本宣示表	1915.4.5	5-2、5-3。黒木欽堂の解説。何焯（1661-1722）跋あり。羅振玉旧蔵と見られ、明治45年（1912）5月頃、博文堂を介して購入。明治45年（1912）5月4日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WE1-004-4）参照。
旧拓宝晋齋 本黄庭経	1915.5.5	5-3、5-4、5-5。黒木欽堂の解説。大正癸丑蘭亭会（1913）へ出品された。大正2年（1913）2月26日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WE1-008-2）参照。影印本に『唐撫宋拓黄庭経』（油谷博文堂、1914.6.14）があり、昭和5年（1930）以前に大西見山から高島槐安（1875-1969）の手に帰し、現在は東京国立博物館に所蔵されている。

① 黒木欽堂との関係

黒木欽堂（一八六六—一九二三）は日本で初めての本格的な書道雑誌『書苑』（一九一一）を創刊した人物である。大西見山とは同郷の香川県出身であり、古くから面識があった見られ、博文堂関連資料では、大正五年（一九一六）までの交友関係を確認することができる。また、『書苑』にも大西見山コレクションを何度も提供している（表1）。

上掲明治四五年（一九一二）三月五日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡（WE1-002-4）に、

……従て此他の法帖類若し他か撮影／申込み候共貴下〔油谷達〕以外決〔決〕して応諾／〔四枚目〕致し不申候間此点ハ御安神〔心〕可被下候／〔黒木〔欽堂〕あたり方書苑へ載せ候様申参り候任無論謝／絶致すべく又骨董家又ハ尋常好事家等／へも容易ニ見せ申さゝる積ニ御坐候（一）

とあるように、博文堂が仲介したコレクションに対しては黒木欽堂の影印に対する申し出があっても断る旨が記されており、美術出版も手掛けていた博文堂に対して配慮していたことが窺われる。

明治四五年（一九一二）四月三〇日油谷達宛大西行礼

〔見山〕書簡 (WEI-004-2) に於て、

……翁〔方綱〕批肅／帖〔肅府本淳化閣帖〕ハ東京

黒木欽／堂翁大感服ニて／是非書苑へ／出し度旨申

越候

とあるように、黒木欽堂は、大西見山所蔵の「淳化閣帖」肅府本に関心を示し、実際、『書苑』二卷第五号（一九一三年一月五日）以後に「翁方綱校勘淳化閣帖」として連載されている。『書苑』二卷五号に掲載された黒木欽堂の解説に、

……寔に是れ覃谿〔翁方綱〕先生多年精力を集注せられたる痕迹を認め得るものにして、書学に志すの君子は其の修正の点画に依りて古人の風格を悟り得るのみならず、其の校勘の精嚴を觀て亦以て進道の一端と為すべきものたり、況んや又肅府本は人其の近くして遇ひ易さを謂ふものあれど、上石初搨斯帖の如く鮮明なるものは常に觀難きに於てをや。

と記されるように、該帖が初拓本でしかも翁方綱の精密な校勘があることに對して、書学上の価値が高いことを激賞している。さらに、大正四年（一九一五）三月一日油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡 (WEI-012-4) に、

……昨朝〔黒木〕欽堂翁來訪致／〔二枚目〕し肅府

〔本淳化〕閣帖全部出版／致し度旨懇請致され実／

ハ其為め態々南歸致し様／被申候二付き承諾を表し／置き候尚宋拓二三種／も出版致し度様被申候得共／〔三枚目〕是ハ兼て貴下と御約束／致し故を以て

謝絶致し置／き候間御安心可申候為念申／上置候欽翁〔黒木欽堂〕も歸途入／洛致し候様申居られ候

と見えるように、黒木欽堂は本帖のすべてを出版したい旨を大西見山に懇請し、数ヶ月後に『翁覃谿校勘秘本淳化閣帖』（法書会出版部、一九一五年五月一七日）として結実している。上述のように、本帖は博文堂ではなく文求堂を介して獲得したコレクションであることも手伝つて、黒木欽堂に影印刊行を許諾したのである。その証左として、博文堂より入手した「宋拓二三種」の出版については謝絶している。

また、大西見山は「澄清堂帖」に関しても言及している。「澄清堂帖」は実態の不明な集帖であるが、原刻を南宋刻と見るのが通説であり、明の邢侗（一五五一—一六一二）旧蔵本（廉泉本及び紫藤花館本よりなる）、孫承沢（一五九二—一六七六）旧蔵本が原刻の零本であるとされる。

明治四十五年（一九一二）二月頃に、大西見山は羅振

玉より「澄清堂帖」購入し、それをもとに「帖祖齋」と号し、『南唐拓本澄清堂帖』（博文堂合資会社、一九二一年八月八日）を刊行している。「南唐拓本」と題するのは、附載する羅振玉壬子（民国元年、一九一二）三月跋中の南唐の覆刻説に因むが、藤原楚水（一八九〇—一九九〇）が孫承沢旧蔵本の翻刻ではないかという見方を示しているように異論も見られる⁽²⁹⁾。

その後、上掲明治四五年（一九一二）三月五日（WEI-002-4）に、

……澄清堂帖上海の様子承り驚人／申候如御如此両間の至宝僻境／「三枚目」の小生「大西見山」の手に入り候ハ天助と申ながら……

と記されるように、「澄清堂帖上海の様子」、すなわち廉泉所蔵の邢侗旧蔵本が日本にもたらされる情報が伝わっていたようである。

一方、黒木欽堂は、『書苑』二巻第六号（一九一三年二月五日）で「重刻澄清堂帖残本」（梶原樵石旧蔵本）を掲載し、次のように解説する。

……此を明代邢子愿「侗」が所蔵せし南唐澄清堂帖を重ねて摹刻せるものとす、摹刻石に上しし者を呉応祈父子とす、……

とあるように、邢侗旧蔵の「澄清堂帖」を重刻本したものと見る。これに対して、大正二年（一九一三）二月一九日油谷達宛大西行礼「見山」書簡（WEI-008-3）に、

……書苑所載の澄／清堂帖翻本ハ／先般羅「振玉」先生御／惠贈の物と同一物と／被存候「黒木」欽堂翁も／法帖ハ餘り好き／物の見ぬと相見へ／候呵々」とあるように、大西見山は自身が所蔵する「澄清堂帖」のような善本を黒木欽堂が知らないことを嘲笑している。また、大正二年（一九一三）五月二九日油谷達宛大西行礼「見山」書簡（WEI-010-2）に、

……然ハ澄清堂帖／ニ付き京師「京都」両「羅振玉、内藤湖南」先／生御伝言之趣敬／承仕候不相変御／厚情不堪感謝／候得共此帖ハ尔来／世宝として十襲珍「珍」／蔵致し居候次第にて／御申越し黒木「欽堂」説の／如きハ盲評取るに／足らず全く越犬吠雪之類と一咲「笑」ニ付し／候迄ニ御坐候

と見えるように、黒木欽堂は大西見山所蔵の「澄清堂帖」に疑義を唱えたようであり、それに対する羅振玉と内藤湖南からの弁明を博文堂が伝えている。

前稿では、近代書画碑帖収蔵史の第二期においては、「書苑を中心とする収蔵集団」と「犬養木堂を中心とす

る収蔵集団」を中心として収蔵活動が行われ、特に前者の消滅と関東大震災により、後者の事務局である博文堂が関西の収蔵家に中国の書画碑帖を斡旋したことで、関西に一大コレクションが形成されたことを明らかにし、大西見山が両収蔵集団に両属していた人物として重要であることを指摘した⁽³⁰⁾。

本稿での検討によって、大西見山は少なくとも明治末年から書苑の主幹であった黒木欽堂との交友関係が認められ、『書苑』にそのコレクションを提供したが、羅振玉と交友関係を持つ博文堂との関係性を重視していたために、黒木欽堂との関係には一定の距離を保っていたことが判明した。

(2) 博文堂をめぐる鑑定家との関係

ここでは、大西見山自身の鑑定方法と、大西見山の博文堂をめぐる鑑定家（羅振玉、長尾雨山、内藤湖南）との交友関係を検討してみたい。

上掲明治四五年（一九一二）三月六日油谷博文堂宛大西行札〔見山〕書簡（WEI-002-3）に、

……○過日方藥雨〔若〕校／碑隨筆一讀仕候処例の麻姑仙壇記／及麓山寺、道因法師両碑の事委敷／論

しあり／因て原碑と対照仕候処一々吻合／致し又麻姑仙壇記ハ羅〔振玉〕氏御旧蔵の分／〔二〇枚目〕上海にて石印本出来居候由記載致しあり／一層欣賞致し居候

とあるように、大西見山は明治四五年（一九一二）の時点で、方若『校碑隨筆』によって碑帖を対校して鑑定をしていたことが窺われる⁽³¹⁾。菅野智明氏によると、『校碑隨筆』は光緒年間（一八七五―一九〇八）に初版本があり、同書が時の金石学を牽引した王懿榮（一八四五―一九〇〇）が創案者と目され、王懿榮およびその後身が形成する金石ネットワークの高い水準を反映したものであると論じている⁽³²⁾。ゆえに、大西見山はその刊行とほぼ同時期において同書を入手し、清末における金石学、書学の先駆的な成果を享受して鑑定に用いており、当時においては進歩的な収蔵家であったことが窺われる。

また、博文堂で書画碑帖を購入する場合、博文堂をめぐる鑑定家に書画碑帖の題跋を書いてもらい、その骨董的価値を高めるのが一般的であるが、大西見山もその例にもれない。ただし、大西見山が博文堂以外で獲得した書画碑帖については、大西見山自身で鑑定することが難しい場合には、羅振玉、長尾雨山、内藤湖南にも鑑定

を依頼することがあった。大正五年（一九一六）一月四日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡（WEI-016-4、一通目）に、

……次ニ又々御手数数相懸／け恐入候得共只今張晴嵐〔若靄〕／五君子図一幅郵送仕候／間御入洛之御序ニ御持参／羅〔振玉〕先生及藤〔内藤湖南〕尾〔長尾雨山〕両先生へ／〔四枚目〕御審定御願ひ可被下候若／し真迹ニ御坐候得ハ別／帋相認め候事ニ付委敷／御示教相希度候間御含／み置可被下候……〔七枚目〕○張〔若靄〕幅中鍊雪一印あり又梁跋／中張鍊雪先生之語あり然るに／諸書ニ就き取調へ候処鍊雪／弟若澄之字号ニて〔張〕若靄／ニ此別号ある事発見不仕／漸く狐疑を生し居候併し幅／〔八枚目〕ハ一見尤ら敷相見可申候間或ハ／〔張〕若靄も一時鍊雪の号を／を用ひ後弟ニ譲り候様之事／無之哉可成左様あり度候／此義諸先生へ御伺可被下／候と記されているように、大西見山自身でも、清の張若靄（一七二三—一七四六）「五君子図一幅」の落款と押印された「鍊雪」一印の齟齬について指摘した上で、該幅を博文堂を介して、その京都滞在中に羅振玉、長尾雨山、内藤湖南の三氏に鑑定を依頼している。

この件に関しては、本書簡にしか見えず、三氏の鑑定結果は不明であるが、大西見山は、自分自身の鑑識と博文堂をめぐる鑑定家の意見を聞きながら、収蔵活動に邁進していたことが明らかとなった。

おわりに

本稿では、博文堂関係資料によって大西見山をとりまく書画碑帖の売買及び鑑定をめぐる交友関係について検討し、大西見山の書画碑帖収蔵ネットワーク及び近代書画碑帖収蔵史の第二期における書画碑帖の日本への複層的な流入経路について明らかにした。

まず、前者については、大西見山が初期羅振玉コレクションによって書画碑帖の鑑識眼を養い、『校碑随筆』に見られる先駆的な知見や博文堂をめぐる鑑定家の意見に基づいて、中国の書画碑帖コレクションを形成したことが明らかとなった。また、明治四五年（一九一二）以後は博文堂を出入り業者として優遇したために、黒木欽堂や文求堂（寸紅堂）との関係には一定の距離を保っていたことも判明した。

後者に関しては、明治末年に京都避居に伴い、日本に

大量の文物を持ち込んだ羅振玉によって、日本における中国書画碑帖の市場が本格的に開かれたことが判明した。この市場がこれから拡大が見込まれる新規開拓分野と目されたために多くの業者が参入したが、大正中葉を過ぎると、中国書画碑帖の優品を扱う業者は、少数の業者によって寡占されていく状況が明らかとなった。すなわち、いずれも羅振玉と交友関係にあった文求堂（寸紅堂）と博文堂であり、顧客獲得を巡って熾烈な販売合戦が繰り広げられていたことが明らかとなった。なお、中国書画碑帖を収蔵対象としたのは、漢籍に素養があり、中国文化に造詣の深かった人物に限定されていたことも指摘した。

今後の検討課題としては、第二期の当初より活動し、大西見山同様に「書苑を中心とする収蔵集団」と「大養木堂を中心とする収蔵集団」に両属した山本二峯（一八七〇—一九三七）の収蔵や交友関係に関して、博文堂関連資料をもとに検討したいと考えている。

【注】

- (1) 拙著『清末民初書画碑帖収蔵研究』（知泉書館、二〇二三、一七—二六頁）参照。
- (2) 以下、大西見山の基礎データに関しては、拙稿「大西見山の収蔵活動と日本への碑帖流入の実態」（『大学書道研究』第一六号、二〇二三、四一—五二頁）参照。
- (3) 前掲注（2）拙稿参照。
- (4) 田淵元博「三野二山の生涯と長尾雨山・大西見山の交友（2）」（『書論』第四六号、二〇二〇、一三七—一四六頁）参照。
- (5) 前掲注（2）拙稿参照。
- (6) 以下、文求堂（寸紅堂）の活動に関しては、拙稿「久野錦浦の収蔵活動と博文堂（美術商）初期の活動実態」（『相模国文』第五〇号、二〇二二、二一—二四頁）参照。
- (7) 前掲注（6）拙稿掲載明治四五年（一九一二）四月一五日油谷博文堂宛久野元吉「錦浦」書簡（中、3-4）参照（八二頁）。
- (8) 大正二年（一九一三）十一月一三日油谷達宛大西行礼「見山」書簡（WEI-011-4）の「……次ニ

王漁洋〔士禎〕詩幅及／金僧心経卷／出品之義ハ誠／ニ御易き事ニ御／坐候得共……」とある。

- (9) 大正一三年(一九二四)一月二五日原田庄左衛門〔大観〕宛大西行礼〔見山〕書簡(WEI-018-4)に、「……何を申も兵站部の／充実第一ニ候間機会あれハ／例之肅府〔本淳化〕閣帖〕周敦盖〔蓋〕／及漢銅印之一部売却／方何分御配慮奉懇請候」とある。

- (10) 『東京外国語学校一覽〔従明治卅七年／至明治卅八年〕』(東京外国語学校、一九〇五、九八頁) 参照。
(11) 方若原著、王壮弘増補『増補校碑隨筆』(上海書店出版社、二〇〇八、五八―五九頁) の方若原著部分に、「……在第四行肅肅二字、下一肅字泐于道光初年。」とある。

- (12) 富田昇『流転 清朝秘宝』(日本放送出版協会、二〇〇二、一一二―一一五頁)、朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』(新潮社、二〇一一、一三七―一四三頁) 参照。

- (13) 大正元年(一九一二)八月一四日、油谷達宛大西行礼〔見山〕書簡(WEI-007-2) 参照。

- (14) 明治四五年(一九一二)三月六日油谷博文堂宛大

西行礼〔見山〕書簡(WEI-002-3) に、「……○過日方藥雨〔若〕校／碑隨筆一読仕候処例の麻姑仙壇記／及麓山寺、／道因法師両碑の事委敷／論しあり／因て原碑と対照仕候処一々吻合／致し又麻姑仙壇記ハ羅〔振玉〕氏御旧藏の分／〔一〇枚目〕上海にて石印本出来居候由記載致しあり／一層欣賞致し居候」とあるように、恐らくは羅振玉所藏のものであるう。『初期羅振玉書画碑帖コレクション目録』(目録の概要は、拙稿「初期羅振玉書画碑帖コレクションの日本への流入」〔『書道史研究』第三二号、二〇二二、五七―七〇頁) 参照) にも本書簡に指摘のある三碑の掲載(N 293「宋拓麓山寺碑」陶文毅公旧藏「一千元」、N 295「宋拓道因碑」中間有缺「七百元」、N 300「南宋拓大字麻姑山仙壇記」張叔未跋「四百元」が見られる。前掲注(14)『初期羅振玉書画碑帖コレクション目録』に、N 192「明程孟陽山水長卷 350」、N 407「程孟陽山水図巻」と見える。

- (16) 戦暁梅「廉泉と大村西崖の交友―『大村西崖宛廉泉書簡』『南湖東遊日記』を主な手掛かりに―」

(『美術研究』第四二五号、二〇一八、三五―五四頁) 参照。

(17) 南湖扇面美術館の内部の写真(関西大学図書館内

藤文庫所蔵) に関しては、邱吉「民国初期廉泉与

日本芸壇的互動」(『美術学報』二〇二〇年第六期、

七〇―七七頁) 参照。また、「滄海日對聯」は、

中田勇次郎責任編集『書道芸術』第一〇卷所載第

七八図(中央公論社、一九七二、解説は二〇七頁)

参照。なお、写真と對聯の同定は劍持翔伍氏のご

教示による。

(18) 野田宇太郎「彙文堂のはなし」(『定本文学散歩全

集』第八卷、雪華社、一九六一、八三―八五頁)

参照。

(19) 前掲注(2) 拙稿参照。

(20) 大谷大学図書館編『大西行礼氏旧藏悠然楼漢籍分

類目録』(同館、一九七七) 参照。

(21) 拙稿「林朗庵の収蔵に関する一考察」(『相模国文』

第四九号、二〇二二、二六―六六頁) 参照。

(22) 林朗庵に関しては、前掲注(20) 拙稿参照。

(23) 前掲注(2) 拙稿参照。

(24) 前掲注(14) 『初期羅振玉書画碑帖コレクション

目録』に、「朱竹垞〔彝尊〕詩冊」については、

N 20「朱竹垞書冊 六十元」、N 147「清朱竹垞書詩

冊」、N 273「朱竹垞書冊 60」、N 575「朱竹垞詩冊」

と見え、「張船山〔問陶〕墨梅／小卷」に関しては、

N 17「張船山墨梅卷 五十元」、N 212「清船山墨梅

図卷 50」、N 539「張船山墨梅」と見える。

(25) 大正四年(一九一五)三月一日油谷達宛大西行

礼〔見山〕書簡(WET-012-5)にも、「……伊藤〔長

次郎〕へハ御相談出来候哉／如何」とある。

(26) 前掲注(5) 拙稿参照。

(27) 東京美術倶楽部百年史編『美術商の百年―東京美

術倶楽部百年史』(東京美術倶楽部他、二〇〇六)

を一覧しても、新来の中国の書画碑帖の売買につ

いてはほとんど確認することができない。

(28) 久世夏奈子「『国華』に見る新来の中国絵画―近

代日本における中国美術観の一事例として―」

(『国華』第一三九五号、二〇二二、五一―一七頁)

参照。

(29) 藤原楚水「澄清堂帖及び書譜薛氏本の原石に就

て」(『書苑』第一卷第二号、一九三七、二―九頁)、

同「再び澄清堂帖に就て」(『書苑』第一卷第三号、

一九三七、七八―七九頁）参照。

- (30) 拙稿「中国書画碑帖の日本流入に関する一考察―収蔵家・菊池惺堂を起点として―」（『日本中国学会報』第七一集、二〇一九、一八七―二〇〇頁）参照。

- (31) 前掲注（11）『増補校碑隨筆』（三八七頁）の方若原著部分に、「……上海原石影本即上虞羅叔韞〔振玉〕所藏有張廷濟題字之本也。」とある。

- (32) 菅野智明「『校碑隨筆』誕生の周辺」（書学書道史学会編『書学書道史論叢／2011』、萱原書房、二〇一一、二八一―三一四頁）参照。

【附記】

本稿は主に二〇二二年度の行田市郷土博物館、徳富蘇峰記念館及び個人蔵資料の調査研究に基づく。本稿執筆に際し、上掲個人及び機関、並びに関西大学図書館より資料提供を受けた。記して御礼申し上げたい。本稿はJSPS科研費一九K〇〇二〇一の助成を受けたものである。

（本学准教授）